

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成十九年四月二日発行（毎月一回二日発行）
第十三卷第十二号（通巻第一五六号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第156号

4. 2007

肘掛け

品川 鈴子

夢二生家

ざんばらに夢二の背戸は竹の秋

三つ指で拝す夢二の飾り武具

北窓開け夢二の机インク染み

肘掛けに夢二春愁の脂しみ



天好園

高見山書割めきて花吹雪

訣れ会までは散らじと宇陀の花

帰り道菟田の草餅抓み喰ひ

大ぶりに菟田の草餅餡はみ出す

金蠅に生れしばかりに嫌はるる

昔菴の四つ葉みつかる夫亡くも



玉 鈴

愛媛 足利 諄子

風花に童ぼかんと口を開け
弔ひの矢印たどる凍てし道
野辺送り同期集ひて冬の雨
傘寿過ぎ卒寿をめざす日記買ふ
りハビリの膝きくと鳴り年迫る

愛媛 足利 徹

初太鼓杜をゆるがす撥さばき
初荷旗立ててトラック列をなす
手ほどきをせし子あざやか独楽さばき
俎板に包丁当つ音四日朝
包丁の音も妙なり初厨

大阪 尼崎太一郎

年越せり片道切符乗り継ぎて
特攻の友年越せり二十のまま
紅葉山頂上に出て日の匂ひ
息白く肩で肩押し登校児
芋粥や竹の杓子の灰汁光り

吟

兵庫 荒木 治代

思ひまだ俳句にならず年詰る
三ヶ日旅に出る人籠る人
貼り紙は火の元注意風荒ぶ
背を向けて男ばかりの焼鳥屋
空つ風画鋏の残る揭示板

大阪 池田 かよ

初あかね二タ上山は鞍正す
梯の浮かびて消ゆる初み空
辻棲を合はせ悦ぶ夢はじめ
乗り馴れしツートンカラー初電車
寝正月電子レンジのちんと鳴り

大阪 石橋 万里

教へ子の還暦を祝ぐ菓喰
数へ日の込み合ふ犬の美容室
息白く捻挫の馬が躍り寄る
蹄跡くつきり残し馬場凍つる
初荷解く染屋蕪村の終焉地

愛媛 市橋 章子

綿被き本尊の頬豊かなる
黒塀を潜る板前息白く
夕映えてひゆるると鴨の声のよし
寒の凧名札明るき葉草園
初鴉鉄の手摺に降りて来し

香川 今井 忍

墨書にて休館告げる御用納
風呂桶を檜に替ふも年用意
初鏡母の笄差してみ
舞初の裾さばき美し傘寿にて
横笛の稽古臘梅匂はせて

兵庫 齋部 千里

背に羽を組みて浮寝の老の鴨
もう一度廻せと首振る木の実独楽
追儼会の鬼も平伏し祓はれる
錫杖で割る御手洗の厚氷
寒泳者迎へる浜の大焚火

兵庫 浮田 胤子

麻葉犬来てゐる暮の税関に
小豆粥祖父母しみじみなつかしき
私にもサントさん来しクリスマス
正月の子供列車に乗せらるる
わが前をピヨンピヨン去らぬ子雀ら

大阪 馬越 幸子

初戎浮いた浮いたと木偶廻し
福神楽にて酩酊の木偶えびす
金銀金扇かへして初神楽
臆たけて少し眇の戎巫女
これも福なり宵宮のえびす晴れ

大井 邦子

病棟の消灯変らずクリスマス
退院の御包おくろみずっしりクリスマス
手助けを拒みて幼屠蘇を注ぐ
耳までも紅く染まりて屠蘇の妻
子を持ちて作り方聞く七日粥

薬草歳時記

(一五五) イカリソウ (淫羊藿)

大音悦子

葎草生まれかはりて星になれ

鷹羽 狩行

丘陵や山すその樹の下に生える多年草。

植物観察会で山歩きをする時、10mを歩くのに30分も、時には1時間もかかったりするのですが、イカリソウを見つけた時はうれしくて上から下から右から左から眺めて満足したものです。

4、5月頃咲く紅紫色の花は錨に似ているのでこの名がついたといわれています。

4枚の花弁はそれぞれ先端にいくにつれて細くなったパイプ状で、その先が内側に曲がっています。がく片は8枚ですが花が咲く時、外側の4枚は落ち、内側の4枚は大きくなつて花弁と同じ紅紫色になります。

薬用部位は茎葉で、5月〜夏、根元から刈り取り日陰で乾燥させます。

イカリソウは古くから強精強壯薬として知られています。茎葉に配糖体のエピメジン、フラボノイドのイカリイン、アルカロイドのマグノフロリンを含み、これらは性ホルモ

ンの分泌を促し、知覚神経を興奮させる作用があります。イカリソウは性味が甘・辛・温で、肝経と腎経に入る補陽薬です。つまり、インポテンツ、勃起不全、腰や膝がだるく無力、不妊、頻尿、尿失禁などには単味又は熟地黄・クコ子・肉蓯蓉などと用います。風寒湿痺の関節痛やしびれ、運動障害には桑寄生、威靈仙、秦艽などと用います。強精強壯には1日8〜10gに水^{400ml}を加え半量になるまで煎じ3回に分けて服用します。

中風による半身不随や胃弱には淫羊藿酒が効果的です。作り方はホワイトリカー1720mlに淫羊藿50g、氷砂糖20gを加え密閉して冷暗所に置きます。2、3カ月で熟成します。1回20mlを1日2回まで。コハク色で香りも良いのでストレートでも水割りでもよく、他の果実酒や洋酒と合わせたカクテルとしても利用できます。市販のドリンク剤や薬用酒にも数多く含まれています。

イカリソウは温・燥・不潤で除湿に働くので、体の乾いた老人や病後など栄養状態の悪い時に使うと体調を崩すので注意が必要です。

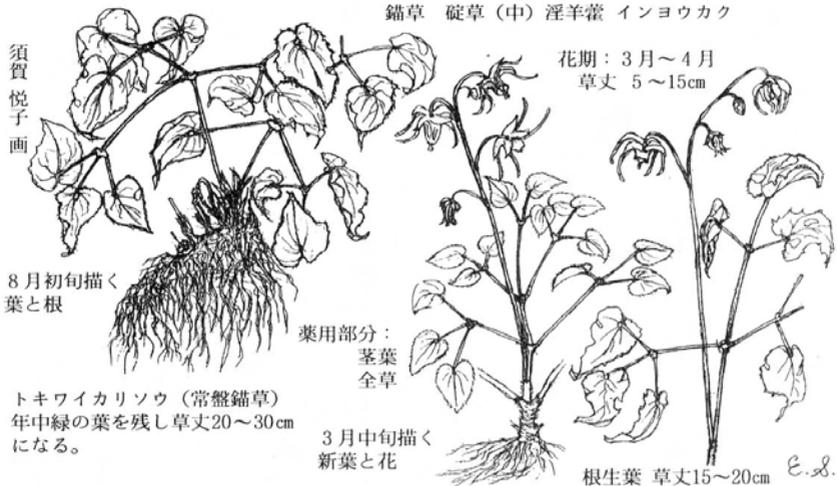
参考文献

- 「原色牧野和漢薬大辞典」北隆館／「漢方医学大辞典」雄渾社
 - 「中薬学」神戸中医学研究会／「薬草カラー図鑑」主婦の友社
 - 「果実酒・薬酒108種」有紀書房
- 著者略歴 神戸薬科大学卒 薬剤師

イカリソウ [イカリ属] (めぎ科)

Epimedium grandiflorum Morr.var. *thunbergianum* (Miq.) Nakai

錨草 碇草 (中) 淫羊藿 インヨウカク



イカリソウ樹下の薄ら陽肥とし	日溜りに忘れ物あり碇草	花少なし一茶生家の錨草	森はいま木洩れ陽の海いかり草	妙見の胸突参道碇草	山の径すべり易しや錨草	兄といふ男をしらず錨草	いかり草むかしもいまも水祀り	錨草花こんがらかつてをる	葉と花と別れて細し碇草
村上	松本	須賀	北畠	勝野	池田	赤松	佐藤	清崎	阿部みどり女
ぐろっけ 和子	ぐろっけ 恒司	ぐろっけ 悦子	ぐろっけ 明子	ぐろっけ 薫	ぐろっけ かよ	薫子	鬼房	敏郎	

鈴の奏

品川鈴子選

知らぬ児と挨拶交はず初詣 愛媛 伊藤 康子

お転婆の祖母が教へる独楽廻し
毛糸帽伸び放題の髪包む

末つ子は早や不惑なり年迎ふ

墾道に信号ひとつ冬木の芽 愛媛 三浦ひろみ

病む人も枕辺正す年用意

業平の在さぬ歌留多祖母残し

それぞれの機械に御神酒初仕事 東京 松本 アイ

たぼたぼと大根炊くや二夜かけ

メールでは届かぬ空気秋夜更く

掌に舞い降りる落葉しかと受く

ままならぬものはそのまま口稀の暮

初日の出山より見んとロープウエー 埼玉 小田 知人

雪の山桃色に染む朝ぼらけ

貸しスキー誘ひに勝てず迂りみる

山の湯を初湯に米寿迎へけり

いつ死ぬか知らぬがよろし花の下 鹿児島 尾崎 省三

靖国の奴呼びよせて花の宴

遠き日の吾と語りてつくし摘む

見る人に万差の思ひ花ふぶき

お年玉貯めパソコンを買ふと云ふ 兵庫 藤川 國子

句のことをきかれ困るも去年今年

未だ言葉無き嬰^や嬰^やフアと初電話

年忘れ人それ^ぐに笑い皺 佐賀 森田 子月

秋風に雲流るるな父逝くな

秋の蚊よ身替り吾^{あれ}を刺し給へ

父の骨重く抱きしめ朝寒し

父泣きし句を口^やずさみ寒オリオン

雪舟の一枚残る古曆 兵庫 高橋 照葉

拾いけり十一文の朴落葉

やり直し効かぬと踏める霜柱

三寒の衣を四温の袖だたみ

夜更かしし初夢もなき目醒かな 鹿児島 原田 圭子

初御空櫻岳噴きて立つ煙

秀 鈴 記

お転婆の祖母が教へる独楽廻し

伊藤 康子

家族の揃うお正月に独楽を廻し始めた子等、日頃は勉強に追われて、あまり扱いなれぬ手つきで要領を得ない様子。傍で見ていた祖母は昔お転婆の虫がうごめき、見るに見かねてしゃしゃり出た。その素晴らしい技に孫達は目を瞠り、尊敬を一身に集めて初春から上機嫌の長老。団欒も賑やかとなることでしょう。

それぞれの機械に御神酒初仕事

三浦ひろみ

町工場の仕事始めには、家族や従業員がこころを籠めて、一つ一つの機械にお神酒を供え無事と繁栄を願う。手入れの行き届いた機械類は、何より大切な仕事仲間。整頓された職場も目に浮かぶが、やがて夫々に稼動して活気が溢る前の静かさ。

巻頭 三句 品川鈴子 評
四句〜十五句 岡本幸枝 //

*選句は全て 品川鈴子

ままならぬものはそのまま古稀の暮

松本 アイ

「人生七十古来稀」とは杜甫の頃の齡。今では人生経験を重ねて、夫々ゆとりと達観を身につけた黄金期。これからは楽しむべき節目だから、思い通りにならないこと等よくよせず、好きなことを極めるだけ。これこそ優雅な余生の秘訣かもしれない。若々しい作者がお手本を示している。

貸しスキー誘ひに勝てず通りみる

小田 知人

新年は雪山で初日の出を拝み、山の温泉でゆつくり初湯を楽しむことにしようと道具を持たずにやってきたのに、貸しスキー屋の看板を見ると、長年鍛え上げた筋肉が承知しない。少しだけ、今年だけといろんな理由を見つけて滑ることにした。やはり誘いに負けてよかつたとも。

靖国の奴呼びよせて花の宴

尾崎 省三

事ある毎に矢面に立たされる靖国問題。同胞の無念さを直に知っている作者だから言える「靖国の奴」に万感を込めて。桜の花びらの散るようにと美化されて逝った英霊たちよ！せめて桜の花咲く下で語り合おうではないか。

お年玉貯めパソコンを買ふと云ふ 藤川 國子

お年玉は誰の指図も受けずに欲しいものを買えるのがミソ。それにしてもパソコンとは。パソコンを自由に使いこなす孫が羨ましくもあり自慢でもあるおばあ様の驚き。着々と目的に向かうお孫様には、頼もしいおばあ様なのでしょう。

秋風に雲流るるな父逝くな 森田 子月

たたみかけ追いかけるように繰り返される語句に、作者の慟哭が聞こえてくるような句。生者必滅と解つていても、秋空に流れる雲さえ留めたいほど、最愛の父上を亡くされた悲しみは大きい。きつとお父様は千の風に乗って、いつも作者を見守っておられることでしょうか。

拾いけり十一文の朴落葉 高橋 照葉

大きな朴落葉を拾って、思わず十一文という足のサイズに置き換えられたところが作者たる所以。江戸時代には、寛永通宝一枚を一文とし、文銭を並べて数えたことから足袋の底を計るのに用いた。戦前まで通用していた靴の単位で十一文は大体男物のサイズになる。普通の朴落葉の長さには二十センチ位なので、人間の足のサイズに置き換えれば、さしずめ十六文キツクのジャイアント馬場サイズといったところでしょうか。

初御空櫻岳噴きて立つ煙 原田 圭子

元旦の朝泉金色に輝き、清々しく正にめでたい初御空、前方に見える桜岳には、噴煙が真っ直ぐに立ち上がり、何か善き事の前兆のように思われる。去年よりひと際鮮明に見える桜岳に向かい、有り難さに思わず手を合わせてしまいました。